

平成30年度 第2委員会 行政視察報告書

1番 波多野 靖明

「おがっこネウボラ」について

日付：平成30年7月25日（水）

場所：秋田県男鹿市役所

男鹿市の子育て支援事業のネーミングが「おがっこネウボラ」である。

単に子育て支援事業とだけの名称で事業を行わない。

“ネウボラ”と名付けることで、市民の「ネウボラって何？」と関心を引くことができたのが、市民の興味を引きことになり、子育てに積極的な街であることを市民の多く、特に子育てに関心のある世代、家族にアピールできた様だ。

当初、“ネウボラ”のネーミングを使用することは、多くの市職員から「既に子育て支援事業は行なっているし、ネウボラの意味がわからない、分かりにくい、市民から批判があるのではないか」と悲観的だった様だ。

しかし、前市長の全国の先進事例を積極的に取り入れる姿勢から、結局は「ネウボラ」というネーミングを取り入れた経緯がある。

同じ制度の活動だったとしても、どの様に良いサービスを構築したとしても、興味を持ってもらい、利用してもらわなければ、優れた制度の活用にならない。

ネーミングでの発信の仕方を多少変えるだけで、人の興味を変えるきっかけになるという事がよくわかった。

伊豆市の子育てに関する事業は、近隣の市町のそれと比べてもより充実した事業が多くあると思う。それらを周知してもらうためのPRの方法、発信の仕方を見直す必要がある。

企業で言えばいかに商品を周知してもらい売り込めるか。そしてリピート率に繋がられるか。商品力が定着してこそ伊豆市子育てのブランドとなるのではないかと考える。

多事業にわたる障害者生活支援センター

日付：7月26日（木）

場所：由利本荘市地域生活支援センター

施設の事業は、「生活介護事業」「児童発達支援事業」「放課後等デイサービス事業」「一般・特定・障害児の相談支援事業」「障害基幹相談支援センター」「障害者就業・生活支援センター」という多くの事業を一ヶ所で引き受ける民間のセンターであることが特徴である。

また、多くの障害者支援の事業所等は、県の建てた建物を使い、事業だけを受託する事が一般的である。しかし、このセンターでは建物も自前で建てて運営もしている。

児童発達支援事業の見学では、1歳から18歳までの子供達の支援を真直で見学できた。

子供達が楽しく遊ぶ姿が見れた、施設の新鮮さや広さがある為、施設整備は充実している様に見えたが、働き手が年々の人口減少とともに少なくなっているとの実態を話されていて、職員確保が、特にこの業界では悩みの様に思えた。

インターネットを活用した遠隔診療について

日付：7月26日（木）

場所：湯沢市役所

遠隔診療という、いわゆる今時の先進事例と言えるべき事業で、タブレットを利用する事を想像し、個人的に使用しているタブレットと同じ様なものとの様に違うのか気になっていた事である。

そのタブレットを利用するための機器整備以外に、医師の診療報酬額の設定、行政側のインフラ整備、システム維持費用の問題など多くの整備が必要である事や苦勞が、現場の医師や看護師、市職員の説明から知る事ができた。

患者の所に看護師が向かい患者の様子をタブレットのカメラで映像の相互通信をして、その都度、医師の判断を仰ぐことになる。

タブレット以外の身体に接触する他の機器も使うことで、リアルタイムに患者の血圧、心拍数等を共用することができ、必要になれば迅速な処置、対応もできそうだ。

市民の高齢化、医師の高齢化もある事から、今後の医療格差の解消は必ず必要な設備になると確信している。

今回の研修から、伊豆市の光ファイバー網・インターネット回線を利用しない手はないと思ったし、伊豆市は遠隔診療を整備をする事に、既にそのインフラ整備が整っている事は今後の方向性により整備のスピードは速いと期待できそうである。

また、近隣の中核病院に「朝行って、診察時間はわずかなのに、精算まで含めると夕方まで1日かかってしまった」「具合が悪くて診察に向かったのに待ち時間で更に疲労してしまった」この様な世間話的な事ではあるが市民の医療に関わる不満に答えられるものだと考える。

看護師の説明の中で、「患者さんのお宅に行き、最初、医師ではなくタブレットを見せた時は、ガッカリした様子だった患者さんが、タブレット画面の医師とお互いの顔を見て話ができると、笑顔になり安心した様子で診療を受けてもらった。」

その言葉を聞き、今後の遠隔医療の可能性について安心を感じた。

横手市の「学力向上について」

日付：7月27日（金）

場所：横手市役所

横手市の教育委員会の取り組みで、小中連係教育はもとより、素晴らしい学力向上の取り組みが幾つも印象に残った。

学校間や教員間による子供達の教育格差を作らないために、教育専門官の設置により、小中学校の教員が足並みを揃えて学びの質を高めていく事を念頭にしている姿勢が強く感じられた。

それにより、小中教員のお互いの情報交換がスムーズになり、授業の指導力の向上、教員の質の向上が図られた様である。

また、教育長の「市内で、どの学校に行っても、どの教室に行っても授業スタイルが変わらない事が、“横手市全体”の学力向上に繋がるんです。」という言葉が印象に残りました。

また、「横手市新聞の日」を設定し、年に数回は小中すべての生徒6000人に、子供新聞または中高生新聞を配布している。同時に教員500人にも配布している。

ほぼ毎朝、10分間の読書の時間を設けていることなど、新聞、図書を十分に活用して言語活動の充実をはかり、言葉力の育成、コミュニケーション能力、情報活用能力の向上を目指し、考える力、表現力の育成に全市をあげて取り組んでいる姿勢も強く感じられた。

結果、テストの問題への理解力、解くための考え方の力もついた様である。

他には、スクールバス50台の運行・管理に年間予算の約1億1000万円を含め、新しい校舎の建設、教育内容には相当な費用を掛けていることも注視するべきであると感じた。

改めて、学校建設という物は、グローバルな社会に適応する為、ただ箱物（校舎）を作れば良いという考えではなく、現代社会に適している建物が必要であると考えた。

良い校舎、良い教育環境を整備するために、しっかりと教育予算の確保をして、未来を担う子供達への投資をしていると感じた。

これからの伊豆市にも反映していきたいと思う。